

研究業績解題

I 著 書

1 『大里村史』 資料編 共著 一九八二年三月 大里村役場（大里村史編集委員会編）

担当部分…「おもろさうし」（八〇～二六頁）

おもろさうし概説及び大里関係おもろ七首を選定し、その語釈と解説を付した。

共同執筆者…当間嗣一、大城彗、嘉手苺千鶴子、高良倉吉、小島櫻禮、金城功、富島壮英、安里進、普天

間俊男

2 『琉球の言語と文化 仲宗根政善先生古希記念論文集』 共著 一九八二年六月 （仲宗根政善先生古希

記念論文集刊行委員会編）

担当部分…「記紀歌謡物語の形成」（五二九～五四三頁）

古事記・日本書紀の編纂に多数の歌謡資料が用いられたが、その記紀歌謡と所伝部分は歌謡物語と称される。本稿は記紀の応神・仁徳の両天皇の歌謡記事を比較検討し、特に仁徳記の元来独立する四歌謡物語が、石之日売の嫉妬をテーマとして一大歌謡物語を構成するものであるとして、その形成について考察した。

共同執筆者…服部四郎、本永守靖、津波古敏子、狩俣繁久、加治工真市、名嘉真三成、生塩睦子、松本泰

丈、内間直仁、名嘉順一、野原三義、中本正智、高橋俊三、多和田真一郎、中松竹雄、岡本

恵徳、仲程昌徳、池宮正治、照喜名繁夫、比嘉実、玉城政美、島村幸一、渡嘉敷守、波照間

永吉、石垣繁、嘉手苺千鶴子、末吉武光、宮良安彦

3 『西原町史』 第二巻資料編一 共著 一九八四年三月 西原町役場（西原町史編纂委員会編）

担当部分…「西原関係おもろ」（二二七～二九頁）

おもろさうし概説及び西原関係おもろ二二首を選定し、その語釈と解説を付したものである。

共同執筆者…嘉手苅千鶴子、西原文雄、西原実、平良利夫、平敷令治

4 『日本文芸史』 第一巻 共著 一九八六年五月 河出書房新社（古橋信孝編）

担当部分…「第四部第一章 琉球文学」（二六五～二九九頁）

琉球文学の本格的な研究は近年になってようやく盛んになったが、日本文芸史における位置付けは問題であり、本書では古代篇に据えて、琉球文学全体の概説を試みた。うたいつがれる謡（呪禱的歌謡・王府歌謡・組踊）、伝承と記録（村むらの伝承・王府の記録）に分類して説く。

共同執筆者…古橋信孝、高橋六二、高野正美、森朝男、野田浩子、鈴木日出男、辰巳正明、藤井貞和、呉哲男、近藤信義、三浦佑之、工藤隆、多田一臣、嘉手苅千鶴子、浅井亨、宮腰賢

5 『おもろさうし精華抄』 共著 一九八七年六月 ひるぎ社（おもろ研究会編著）

担当部分…

①『『おわもり』と『こしりやへ』（二〇八～二二三頁）

『おもろさうし』にみえる神女の「おわもり」と「こしりやへ」の実態について探ってみた。両神女名は、前者が身分高い五人の女性、後者は奄美・沖縄の各地に同名の女性が確認でき、ともに特定個人に限定できないことを明らかにした。神女名からおもろ歌謡の性格がうかがえる。

②「我守て此の海渡しよわれ」（二四七～二五三頁）

『おもしろさうし』の航海おもしろの常套句「あんまぶてこのとわたしよわれ」を持つ十五首について、表現の意図と収録のあり方、及びふし名に注目し、その特徴を明らかにした。

③ 「桑木の鼓」(三四九～三五四頁)

『おもしろさうし』にみえる鼓について、鼓造りの材料やその過程を謡い込むことで鼓を賛美し、また鼓の音が呪的効力をもつことを詳述した。

④ 「群行する神女」(三五五～三六〇頁)

『おもしろさうし』は王府の神女祭祀と深いかかわりもつ神歌集であるが、神女たちの群行する祭祀場面を彷彿させるおもしろ群があることを明らかにした。

共同執筆者…仲宗根政善、池宮正治、高橋俊三、レオン・セラフィム、関根賢司、玉城政美、平山良明、

福地唯方、嘉手苺千鶴子、宮城信勇、島村幸一、大城盛光、秋山紀子、末次智

6

『日本文学研究における琉球文学の定位と文学史研究再編の試み』 共著 一九八九年三月 昭和六三年

度科学研究補助金(総合A) 研究成果報告書(池宮正治代表)

担当部分…「おもしろ歌人の性格―『くちまさしや』を手がかりに―」(三九～四七頁)

おもしろ歌人の性格について、そのおもしろだけにみえる「くちまさしや(口正しや)あもの」という文句を通して、靈威ある言葉の伝達者という性格をもつことを考察した。なお、本稿は『『おもしろさうし』歌人考』の一部に加筆したものである。

共同執筆者…池宮正治、岡本恵徳、関根賢司、嘉手苺千鶴子、藤井貞和、古橋信孝、森朝男、山下欣一

7

『近世沖縄和歌集 本文と研究』 共編著 一九九〇年五月 ひるぎ社(池宮正治・嘉手苺千鶴子・外間

愛子編)

担当部分…解説部分以外（共同編著につき本人担当部分抽出不可能）

近世沖縄の和歌集（沖縄集・沖縄集二編・松風集）の版本を翻刻し、解説（書誌と編集、編者、薩摩歌壇との交流）と索引（初句索引、歌人別 名索引、歌人別 歌索引）を添えて、これまで皆無であった近世沖縄の和歌集の本文とその研究成果をまとめたものである。

共同執筆者…池宮正治、嘉手苺千鶴子、外間愛子

8 『南島の文学・民俗・歴史』 共著 一九九二年十二月 三一書房（谷川健一・山下欣一編）

担当部分…『琉球文学にみる『露』の呪力』（二四七～二六八頁）

文学にあらわれた「露」について、和歌の中では古代以来その無常観（はかなさ）を示す性格がもてはやされている。が、おもろや琉歌などの琉球文学の中ではその呪的な性格がむしろ顕著であり、今日では忘れられている「露」の民俗を提示し、琉球の古歌謡に顕著な呪禱的性格の要素を明らかにした。

共同執筆者…山下欣一、小野重朗、嘉手苺千鶴子、島村幸一

9 『日本文学史』一五巻（岩波講座） 共著 一九九六年五月 岩波書店（久保田淳・栗坪良樹・野山嘉正・

日野龍夫・藤井貞和編）

担当部分…「琉歌の展開」（五五～七八頁）

琉歌について、琉球文学史における琉歌の位置とその受容の展開に留意して、本土側の記録と沖縄側の琉歌集などのあり方を通して、問題を提起しながら論じた。琉歌の改作和歌・琉歌とその形式・おもろの改作琉歌・琉歌集と琉歌作者・和歌の改作琉歌の見出しで論述した。

共同執筆者…池宮正治、玉城政美、嘉手苺千鶴子、比嘉実、関根賢一、上里賢治、末次智、仲程昌徳、岡本恵徳、目取間俊、与那覇恵子、山下欣一、酒井正子、古橋信孝、波照間栄吉、島村幸一、小川学夫、高橋俊三

10 『魂をめぐる日本の深層』 共著 一九九六年七月 角川選書シリーズ 角川書店（梅原猛・中西進編）

担当部分…「琉球文学にみる魂観」（二二七～二四二頁）

琉球文学にあらわれた魂観について、ウチナーポップス、組踊「執心鐘入」と民話、和文「苔の下」、和歌集「沖縄集二編」、琉歌集「古今琉歌集」、それに「おもろさうし」を通して、それぞれのあらわれ方を検証し、本土和文学と比較して考察を加えた。一般に遊離する魂観がいつそう複雑な展開をみせており、魂の更新・強化、守護・加護など積極的な授受の思想があることを指摘した。

共同執筆者…梅原猛、福永光司、宮田登、崔吉城、山田孝子、赤嶺政信、比嘉康雄、嘉手苺千鶴子、小島瓊禮、児島恭子、中西進

11 『古代文学講座 歌謡』 第九巻 共著 一九九六年七月 勉誠社（古橋信孝・三浦佑之・森朝男編）

執筆部分…「琉歌」（二二五～二四五頁）

紀要論文「琉歌の諸相」を若干加筆し転載した。

共同執筆者…森朝男、土橋寛、近藤信義、真下厚、神野富一、富岡薫、馬場光子、植田恭代、横田淑子、廣岡義隆、月野文子、島村幸一、嘉手苺千鶴子、佐々木幹郎、道浦母都子、大塚一美、蓮池悦子、関根賢司、高良勉

12 『南島文化への誘い』（沖縄国際大学公開講座七） 共著 一九九八年三月 那覇出版社（沖縄国際大学

公開講座委員会編)

担当部分…「琉球文学への誘い―『おもろさうし』の魅力―」(二九七～三二六頁)

現在ではほとんど謡われることのない「オモロ」という歌謡とは、どのようなものであるのか。本稿では、オモロの世界を、「一」「又」という形式や節名、『おもろさうし』という歌謡集、『おもろさうし』全二十二巻のうち半数を占める地方オモロ群、『おもろさうし』の再編纂という大きく四項目に分けて紹介している。中でも、地方オモロについては、本島南部・東部・西部と奄美のオモロを紹介し、そこからオモロに謡われる英雄や神女についてまで、幅広く紹介している。なお、この論文は平成九年度沖縄地区大学放送公開講座(テレビ講座)のものを加筆・修正したものである。

13

『仲里村史』第二巻 資料編一 共著 一九九八年三月 仲里村役場(仲里村史編集委員会編)

担当部分…「仲里関係オモロ」(二九三～五一七頁)

本稿では、まず『おもろさうし』を、オモロについてや編者と伝本、成立と構成、形式と内容、作者と歌唱者、地名の六項目について概説を行っている。次に久米島関係オモロを通して、当時の久米島の持っていた機能やその中に出てくる地名および、巻一と二にみえる混入の問題について触れている。最後に仲里関係オモロについて、仲里村に關係する一二群のオモロ語を取り出している。以下は、この一二群のオモロについての復元本文、訳文、原文、大意、解説を施している。

14

『歌謡 文学との交響』(古典講演シリーズ四) 共著 二〇〇〇年二月 臨川書店(国文学研究資料館編)

担当部分…「近世沖縄の和歌」(二二九～一七八頁)

本稿は、琉球文学の中でも近世沖縄の人々の手による和歌や和文学に關しての概説を大きく三つの見出しに分けて行っている。まず、「近世沖縄における和歌の享受」では、和歌や和文学が士族の教養であったことや和歌の流派、和歌を改作した琉歌、和文学の受容について述べている。「近世沖縄における和歌の特徴」では、識名盛命の『思出草』を中心に、近世沖縄での和歌の詠まれた場や好まれた歌について、「近世沖縄の和歌人」では、平敷屋朝敏をはじめとする数名の和歌人についての解説をしている。なお、この文章は平成九年一二月に行われた国文学研究資料館の公開講演会の講演記録である。

『文学にみる日本女性の歴史』 共著 二〇〇〇年二月 吉川弘文館（西村汎子・関口裕子・菅野則子・江刺昭子編）

担当部分…

①「琉球王国の神女たち―おもろさうし」（二二―二五頁）

『おもろさうし』における神女の呼称やエケリ（兄弟）の守護神としての存在、また 神女体制の由来や神女組織確立の歴史、儀礼における神女の持つ機能やその霊力（セジ）、天降りした神女の姿といった視点から、古琉球の王国女性の活躍する神女の姿について考察している。

②「沖縄の庶民生活と遊女―琉歌百控」（二二八―一三三頁）

『琉歌百控』所収の琉歌を通してみる、近世琉球の女性の姿はどのようなものであったのだろうか。本稿では水汲みや紡織の作業といった女性の日常的な労働を歌った歌、そしてジュリ（遊女）の歌った歌に注目して、検証している。また、近世期の女性が文字を学ばなかったとしながらも、近世琉球期に創作された擬古物語の世界では、文字を書き和歌を楽しむ遊郭女性の姿が描かれていることを指摘している。

なお、右記はそれぞれ『新婦人しんぶん』『文学にみる女性史』（①一九九四年九月二九日発行・②一九九五年一〇月二六日発行）のものを加筆・修正したものである。

16

『柿本人麻呂《全》』 共著 二〇〇〇年六月 笠間書院（橋本達雄編）

担当部分…「人麻呂吉野讃歌からおもろ・琉歌へ―「見れど（も）飽かぬ」の系譜」（三五五～三六九頁）
本稿は、人麻呂の万葉歌とおもろに共通する讃美の語句「見れど（も）飽かぬ」を通して、根底に流れる
宮廷（王朝）歌謡の讃歌性について探ったものである。霊威ある土地を讃美の対象にした人麻呂の吉野讃
歌から始まる「見れど（も）飽かぬ」の思想は、万葉集以後の本土文学を飛び越えて、『おもろさうし』
の歌謡に生かされていることを指摘し、また、おもろ歌唱者の知識の中に和文学を共有した流れが入り込
んでいるのではないかと指摘している。

II 学術論文

1

「古代歌謡と琉歌―速総別王の歌をめぐる―」 一九七六年三月 『専修大学大学院紀要・文研論集』
創刊号（七七～九三頁）

記紀歌謡、風土記歌謡、及び万葉集中の民謡的な和歌と琉歌において、発想・表現の類似したものを通し
て、歌謡のもつ性格とその役割を明らかにした。

2

「古代演劇に関する一試論」 一九七七年三月 『専修大学大学院紀要・文研論集』 第二号（三～三二頁）
記紀の歌謡とその所伝から古代に演劇の存したことが想定されることを考察した。具体的にはイハノヒメ
歌謡劇とメトリノオホキミ歌謡劇を抽出できることを明らかにした。その場合、両者に共通した「戸」の

場面があることに注目し、重要な意義をもつことを指摘した。

- 3 『『おもろさうし』書き改めと『混効験集』の編纂について』 一九七八年一月 『南島史学』 第二一
号 南島史学会 (二三～四七頁)

『おもろさうし』の書き改めスタッフと『混効験集』の編纂者とはおおかた重なり、その時期は近い。両書の記述内容(双紙名・原注と言葉聞書・該当おもろ巻番号)を詳細に比較検討することによって、現存する『おもろさうし』が原本のままとはいえない再編纂本であることを提起し、論証を試みた。あわせて書き改め後の成果とされる『混効験集』が、実際は書き改め以前に編纂されたものであり、突然の書き改め作業によって、未完のまま編纂を終えたものであることを説いた。

- 4 『ウムイとその周辺』 一九七九年七月 『国文学解釈と鑑賞』 第四四巻第七号 至文堂(六七～七三
頁)

沖縄本島及び周辺離島に伝承された歌謡のウムイについて、その収録資料・伝承地域・歌謡の場・謡い手・内容・表現などを、他の歌謡(クエーナ・ミセセル・オモロなど)と比べてその特徴と関係を考察した。

- 5 『『おももり』と『こしりやへ』』 一九七九年十一月 『青い海』 第八七号 青い海出版社(九〇～九
五頁)

*著書 『おもろさうし精華抄』に転載

- 6 『我守て此の海渡しよわれ』 一九八〇年六月 『青い海』 第九三号 青い海出版社(一四六～一五一
頁)

*著書 『おもろさうし精華抄』に転載

7 「おもろさうしと万葉集」 一九八一年九月 『国文学解釈と鑑賞』 第四六卷第九号 至文堂（一七二～一七八頁）

沖繩で最古の歌謡集である『おもろさうし』と最古の和歌集である『万葉集』とをさまざまな観点から比較し、両者の共通性と異質性について具体的に論じた。成立の時代と背景をまったく異にする両者は、相違点はあるがそれぞれの特質とする古代的性格で深く共通することを注目すべきものと指摘した。

8 「ウムイと『おもろさうし』」 一九八二年一月 『国文学解釈と鑑賞』 第四七卷第一号 至文堂（一五九～一六七頁）

便宜上、一般に『おもろさうし』に所収の歌謡をオモロ、民間に伝承のものをウムイと区別しているが、ウムイとオモロとでは、形式・内容・歌唱法・歌唱者などさまざまな面において顕著な相違が認められる。この点を具体的に明らかにした。が、他の古文献の記載をあわせてみると、厳密にはオモロとウムイのこうした区別には問題点のあることをあらたに提唱した。両者の関係については『おもろさうし』の編纂作業の解明と関連して明らかになるものであろう。

9 「蔡温時代と文化」 一九八四年四月 『蔡温とその時代―近代史の諸問題シリーズ―』 離宇宙社（七七～八三頁）

学者、政治家として名高い蔡温の時代の文化、とくに文芸に注目してみると、修史事業が継承発展したところ、文学史上もまた黄金の時代であったことが明確である。すなわち、古歌謡の採録、歌謡集の再編、古語辞書の編纂、さらに琉歌、和歌、和文、組踊などの貴重な文化遺産を痕跡もくつきりと築き残した時代であったことを説いた。

10 「おもろと万葉歌―航海に関わる表現よりみた―」 一九八六年一〇月 『沖繩国際大学文学部紀要（国

文学篇）』 第一五卷第一号（二〇二四頁）

おもろと万葉歌は、それぞれの特質とする古代的性格において深く関わることを、以前に指摘したことがあるが、それぞれのその特質は両者を比較することによってきわだって見えてくる。両者に共通する航海に関わる表現（朝どれ・夕どれ―朝なぎ・夕なぎ、板清らはく手楫選で乗せて―大船に真楫しじ貫き、早帰り来ね―追手風乞うて走りやせ）を具体的に取り上げて、その表現態度の質的な相違を明らかにした。

11 「おもろの鳥―鳴く鳥考―」 一九八七年三月 『沖繩国際大学文学部紀要（国文学篇）』 第一五卷第

二号（一〇九頁）

『おもろさうし』にみえる動物の中で圧倒的に多いのが「鳥」であるが、その根底には鳥に対する根強い信仰のあったことが指摘できる。おもろの鳥を通して、おもろ時代の人々の鳥に対する心境を検証した。ふゑのとり・ふくととり・やまのひよとりのおもろ例を検証すると、鳴く鳥の声は靈威に満ちたものとして、賛美されるものであった。

12 「『おもろさうし』神女孝―詞書きをもつおもろよりみた―」 一九八八年三月 『法政大学沖繩文化研

究所紀要・沖繩文化研究』 第一四卷（二六七―三三八頁）

『おもろさうし』の神女について、詞書きを備えた十七首のおもろに注目してその表現内容を詳細に検証し、特に王府高級神女と国王、神女と神、神女と男性官人、神女と君手摩り百果報事（王府儀礼）の関係を論じた。聞得大君を頂点とする王府神女は国王のおなり神的機能をもつとはいえ優位にたつのは国王であること、男性歌人は臣下の立場で国王賛美し神女を崇めてうたい、神女は神の依り憑き神として国王の

権力強化のための王府儀礼で大きな勢力を有したことを明らかにした。

13 『『おもしろさうし』歌人考』 一九八八年十二月 『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）』 第一七巻第一号（一〇七九頁）

『おもしろさうし』に収録されたおもしろの作者はほとんどが名を記さず不明である。他方、おもしろの名人二名を含めて、おもしろの歌詞には三〇人余の男性歌唱者の名告りがあり、その歌唱者は作者であるという見解で、おもしろ歌人の性格とそのおもしろ表現について考察した。加えて、名告るおもしろ作者から名告らない上級官人たちのおもしろ作者へ変還したことを、おもしろの表現を通して明らかにした。

14 『『おもしろさうし』の謎とその魅力』 一九九一年十二月 『日本歌謡研究』 第三一号 日本歌謡学会

（一〇一〇頁）

『おもしろさうし』に収録されたおもしろの本質は、言霊に満ちた古代的性格を秘めた神歌であるとするが、この『おもしろさうし』について、四つの問題点（Ⅰふし名・Ⅱ詞型・Ⅲ編纂と再編纂・Ⅳおもしろ歌人）を提示した。Ⅰ～Ⅲについては従来の謎とされる疑問点のもつ魅力を提示するにとどめ、Ⅳについてはおもしろ歌人が歌謡者であるとともに呪的な言葉を献上することのできるおもしろ作者であったことを論じた。

15 『謝名思い賛美のおもしろ表現』 一九九二年三月 『浦添教育委員会記念誌・文化課十年のあゆみ』

（一〇一〇頁）

歴史上の人物と結びつけて読み解かれている巻十四の一の有名なおもしろについて、その表現面に注目して、秀歌たる由縁を解明した。この一首は三節で構成されるが、各節の語表現の用法とその連続した構成はきわめて詩的であることを明らかにし、改作琉歌との関係についても考察を加えた。

16 「イノーの文学」 一九九二年三月 『民俗文化』 第四号 近畿大学民族学研究所（五五～七二頁）

琉球列島を形成する珊瑚礁の海岸は、その干瀬とイノー（内海）が島に住む人々の生活と心情に大きな影響を与えていることを、琉球文学を通して検証してみた。まず、沖縄の古謡にイノーや干瀬を賛美と畏怖の心情、おもろに海幸を賛美し海の景観をへ見るゝことにこだわり、さらに琉歌では干瀬の景観に重ねて表出した恋の心情が明らかであることを説いた。

17 「琉歌の諸相」 一九九四年一月 『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）』 第二二巻第一号（一～三五頁）

琉歌について、諸琉歌集の記載内容を詳細に比較検討することによって、詩形・表現・内容・作者の面からその特徴を明らかにし、あわせてさまざまな問題を課題として提示した。

18 「『おもろさうし』にみる神女群像」 一九九四年五月 『歴史評論』 第五二九号 校倉書房（十五～二三頁）

『おもろさうし』には「君」や「のろ」の語を含む名やその他にも美称や敬称の名で呼ばれる多数の神女がみえるが、首里王府に深く関わるこの神女たちの大きな勢力と強い影響力について、『おもろさうし』を通して、その具体的に活躍する姿を論じた。神女の呼称・再編纂の背景・天降りする神女群像・航海とおなり神、の見出しで説いた。

19 「『おもろさうし』太陽孝——太陽に関わる呼称を中心に——」 一九九四年一〇月 『専修総合科学研究』 第二号 専修大学緑鳳学会（六三～一〇二頁）

『おもろさうし』にみえる太陽に関わるさまざまな呼称とその表現について、それぞれの共通点または不

一致点を詳細に検証した。おもろにおける太陽の呼称・表現を通して、古琉球における太陽崇拝と按司賛美を基盤にして、太陽神と神女、太陽セヂ（霊力）と太陽王の密接な関係が琉球王国の宗教的意図のもとに強力に推し進められたこと、かつその太陽王崇拝が近世琉球及び近代になるまで各地に浸透し継承されたことを考察した。

20

『『おもろさうし』にみえる地域区分について』 一九九六年二月 『法政大学沖縄文化研究所紀要・沖縄文化研究』 第二二巻（二三八～三三二頁）

『おもろさうし』にみえる地名を通して、おもろ時代の地域区分について整理し、編纂の方法に考察を加えた。まず、国外の地名と本土の地名をもつおもろによつて、当時の琉球との関係、交流が明らかであること、次に奄美まではおもろの謡われた領域内であるが、先島の宮古・八重山のおもろは含まれておらず、王府との関わりでみえること、さらに地方おもろの十一巻は、沖縄と周辺離島の地域のおもろを整然と地域分類した編纂であることを詳細に論じた。

21

『琉球文学にみる女性観』 一九九六年二月 『沖縄県史研究紀要』 第二号 沖縄県史料編集室（八七～一〇三頁）

琉球文学にみえる女性観について「神女」「遊女」「機織女」に焦点をあて論じた。おもろにみえる女性、琉歌にみえる女性、和歌・和文学にみえる女性などの女性に関わる表現を通して、それぞれの作品にあらわれた女性観の特徴を説き、他の文献資料による記述を参照にしてその虚実を明らかにした。「神女」――女性の神性とその役割、「機織女」――女性の職分と手習、「遊女」――女性の文芸性と文化的役割、の見出しのもとにまとめた。

22 「沖縄の歌謡にみる家族観」 一九九九年三月 『沖縄国際大学日本語日本文学研究』 第三巻第二号

(一〇二九頁)

琉球方言によつて表現された歌謡の中に、沖縄の家族がどのように映し出されているかについて、「琉歌」と「オモロ」の中から、琉球王国時代の家族の特性を探っている。まず、琉歌では親、子、兄弟姉妹の三つの項目から、親子関係の望ましいあり方や、兄弟が家族の幸福の象徴であり、他人との親交を望んだことについてもわかった。オモロでは、兄弟姉妹と大祖父大祖母の二つの項目から、姉妹は兄弟の守り神とする信仰や祖先崇拜の心情が特徴的であると述べている。なお、この論文は平成一〇年一月二五日の「両性與家庭国際学術研討会（於東海大学〈台湾〉）」での発表原稿に大幅な加筆を施したものである。

23 「沖縄の文学と風土」 二〇〇二年三月 『南島文化』 第二三巻(四一〜五一頁)

本土とは異なる文化の中で育まれた沖縄の文学とはどのようなものであるのか。本稿では、「風土」の点に注目し「沖縄の文学」「琉球文学の風土」「琉球文学の季節」の見出しのもと、琉球文学の研究史および日本文学史における位置、「松・竹・菊」からみえる本土および中国との関係、そして琉歌にみえる植物とくに桜の表現を通した沖縄の季節感について考察している。なお、本稿は二〇〇〇年四月二一日に開催した第五一回九州地区大学図書館協議会の講演原稿である。

III その他

(学芸発表・講演・講座等)

1 「戸——古代演劇の一考察——」 一九七四年十月 万葉学会第二六回全国大会（於 大阪成蹊短期大学）

記紀の歌謡とその所伝部分において、「戸」（境界）のある場面がきわめて所作的な演劇めいた描写であることに留意して、古代歌謡劇の存した可能性を想定して論じた。論文「古代歌謡の一試論」を執筆発表した。

- 2 『『おもろさうし』の世界―その謎と魅力』 一九九〇年一〇月 日本歌謡学会平成二年度秋期大会（於

沖縄国際大学）・講演

講演の草稿に加筆して論文『『おもろさうし』の謎とその魅力』を執筆発表した。

- 3 「琉球文学にみる太陽信仰」 一九九三年十月 専修大学緑鳳学会第二回大会（於 専修大学神田校舎）

発表の草稿に加筆して論文『『おもろさうし』 太陽考―太陽に関わる表現を中心に―』を執筆発表した。

- 4 『『おもろさうし』にみえる航海の歌―巻二三の常套句を中心に―』 一九九四年六月 沖縄・韓国国際

学術セミナー（沖縄と韓国の交流史及び文化的諸相の民族学的比較研究）（於 沖縄国際大学）

『『おもろさうし』の航海の歌について、巻二三を中心にきわだつ常套句をもつおもろ群の特徴をとりあげ、航海の安全を望むさまざまな表現と古琉球の信仰生活にみちた神歌であることを説いた。

- 5 「琉球文学にみる『魂』」 一九九五年一月 特定研究「環太平洋圏における日本文化の深層」 シンポ

ジウム「魂をめぐる文学・文化」（於 国際日本文化センター）・パネリストとして発表

発表の草稿に加筆して論文「琉球文学にみる魂観」を執筆発表した。

- 6 『『おもろさうし』と地方おもろ』 一九九六年一月 沖縄国際大学南島文化研究所・第一七回南島文化

市民講座（於 沖縄タイムスホール）・講演とレジュメ（三〇十六頁）

『『おもろさうし』の地方おもろ巻に、巻毎の地域区分とそのまとまり方を地図に示し、沖縄本島とその周辺離島をほぼ網羅していること、地域区分が旧間切区分でまとまることを明らかに示し、さらに王都首里

を離れた地のおもろに辺境のイメージはなく、むしろ王府勢力の豊かさを誇示する役割がみられることを指摘した。なお、論文『『おもろさうし』にみえる地域区分について』は本稿より先の執筆であり、その論を踏まえてさらに補強した。

7 「琉球文学への誘い―『おもろさうし』の魅力―」 一九九七年八月（一三一―一四二頁） 平成九年度

沖縄地区大学放送公開講座（テレビ講座）

琉球文学の中から『おもろさうし』について、研究史、再編纂、および歌謡の性格に注目して、説いた。

8 「近世沖縄の和歌」 一九九七年十二月 国文学研究資料館講演会 「大和から吹く風―沖縄文学の近世

と近代―」（於 沖縄タイムスホール）・講演

近世沖縄における和歌の享受と展開について、享受・鼻祖・特徴、和歌人・和歌集などについてまとめて発表した。

（事典・辞典等）

1 『万葉集辞典』 共編著 一九七五年一〇月 有精堂（伊藤博・中西進・橋本達雄・三谷栄一・渡瀬昌忠

編）

執筆部分…「万葉集研究年表」（五四五―五七六頁）

『万葉集』の研究について、江戸末期までの研究関係の事項を年表にして記した。

共同執筆者…犬飼隆、嘉手苅千鶴子、近藤信義、鈴木日出男、平館英子、高野正美、辰巳正明、都倉義孝、

西原能夫、野田浩子、日吉盛幸、保坂達雄、身崎寿、村田正博、森朝男、横倉長恒

2

『沖縄大百科辞典』 共編著 一九八三年五月 沖縄タイムス社（沖縄大百科辞典刊行事務局編）

執筆部分…あけもどろ（上四二頁）、うりづん（上三三九頁）、うるま（上三三二頁）、沖縄三十六歌仙（上五一九頁）、沖縄集（上五二七頁）、沖縄集二編（上五二八頁）、おもろ語（上六二二頁）、香川景樹（上六七八頁）、桂園派（中二頁）、護得久朝常（中八九頁）、護得久朝常（中八九頁）、護得久朝常（中八九頁）、月しろ（中八一三頁）、つらね（中八三二頁）、『南島歌謡大成』（下八七頁）、にが世（下一〇八頁）、八田知紀（下二二九頁）、福崎季連（下三五六頁）、『琉球文学発想論』（下九二〇頁）、若夏（下八九頁）

おもろ語及び琉球文学関係十九項目を担当した。

共同執筆者…青山俊雄、阿嘉唯通、他一〇四〇名

3

『日本民謡大事典』 共編著 一九八三年六月 雄山閣（浅野建二編）

執筆部分…海のチンボーラ（七六頁）、オモロ（一一六頁）、きいぶぞ（二五〇頁）、クエーナ（二六七頁）、久米阿嘉節（二七四頁）、国頭さばくい（二八〇頁）、汀間と節（三四〇頁）、テンサグぬ花（三四三頁）、西武門節（三八七頁）、花ぬ風車（四一二頁）、ましゅんく節（四六六頁）

沖縄関係の一一項目を担当した。

共同執筆者…浅野建二、池宮正治、他三一名

4

『角川日本地名大辞典』四七沖縄県 共編著 一九八六年七月 角川書店（『角川日本地名大辞典』編纂委員会）

担当部分…『『おもろさうし』の世界』（二〇七二～一〇七六頁）（なお、おもろ地名関係の約四〇項目に

については、他分野との共同執筆となり、担当部分の抽出不可能。

辞典資料の中の『おもろさうし』の解説（とくに地名に関わる点に比重をおいた）とおもろ地名関係の約四〇項目を担当した。

共同執筆者…赤嶺徳盛、東江平之、他一三七名

（写本資料の翻刻と研究）

1 「琉球俗謡集―本文と解説」 一九九二年三月 『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）』 第一九卷第

二号（一～一三二頁）

琉歌集の『琉球俗謡集』の写本資料について、法政大学沖縄文化研究所所蔵の宝玲文庫資料本を底本に翻刻した。また、京都大学所蔵本によつて校訂し、さらに類似の琉歌集である『沖縄声曲集』と、流布の琉歌『琉歌全集』に所収された琉歌との歌詞・節名を校合した結果を付して、琉歌集研究のための便宜を図った。

2 「『南苑八景』―解説と翻刻―」 一九九八年三月 『沖縄国際大学日本語日本文学研究』 第二巻第二

号（一～一四五頁）

琉歌集『南苑八景』の写本資料について、ハワイ大学ハミルトン図書館内「サカマキ・コレクション」蔵の複写本琉歌集を底本に翻刻したものである。また、『琉球大歌集』と『古今琉歌集』、『大歌集』抜粋（真境名安興ら編『琉歌大観』第三冊第十三集の「短歌 読人不知」に所収）といった、関連する三琉歌集に所収された琉歌との歌詞・部立・作者名を校合した結果を付している。

- 3 「若樹文庫旧蔵本『琉歌集』——解説と翻刻——」 一九九八年三月 『南島文化』 第二〇号（一～五六頁）
若樹文庫旧蔵本『琉歌集』の写本資料について、ハワイ大学ハミルトン図書館蔵の特別文庫サカマキ・コレクション内のフランクホーレー文庫本を底本に翻刻したものである。

（研究紹介等）

- 1 「南西諸島の古謡案内『沖縄』」 一九七九年七月 『国文学解釈と鑑賞』 第四四巻第七号 至文堂
（一二〇～一二二頁）

沖縄本島及び周辺離島の古謡について、簡単な案内をしたものである。

- 2 「学界寸評一一四 オモロ研究」 一九八一年八月 『国文学解釈と鑑賞』 第四五巻第八号 至文堂
（一七三～一七四頁）

『おもしろさうし』の研究について、研究会や研究書、研究論文の動向を簡単に紹介・批評したものである。

- 3 「寺社縁起『沖縄』」 一九八二年三月 『国文学解釈と鑑賞』 第四七巻第三号 至文堂（一八二～一八三頁）

沖縄の寺社縁起と関連する固有信仰及び外来宗教について、研究する手がかりとなる主な文献資料を簡単に紹介したものである。